土浦亀城の戦前の独立住宅にみる外観と起居様式の特徴について

THE EXTERIOR AND DWELLING STYLE OF HOUSES DESIGNED
BY TSUCHIURA KAMEKI BEFORE WWII

田中厚子

Atsuko TANAKA

This article discusses Tsuchiura Kameki's use of International Style and traditional dwelling style elements in his prewar houses. Of the 56 houses he designed in the prewar period, 32 have International Style exteriors, 3 are Japanese style, and 11 incorporate elements of both. 11 of the houses' interiors are designed for chairs and tables, 5 for tatami, and 37 for both Japanese and Western-style living. Only 9 of the houses use the "International Style exteriors and chair-style living arrangements" Tsuchiura preferred, and 21 of them mix chairs and tatami mats behind an International Style facade. This demonstrates the difficulty of insisting on International Style exteriors and chair-style living arrangements. In reality, most of Tsuchiura's houses had individual Japanese-style rooms, but these were designed to be unrecognizable from the exterior.

Keywords: Kameki Tsuchiura, Residence, International style, Dwelling style, Residential Improvement, Japanese room
土浦亀城 住宅 国際様式 起居様式 住宅改善 和室

1. はじめに

自邸をはじめとする土浦亀城の戦前の住宅は、「白い都市型モダニズム」として高く評価されている¹⁾。また、戦前の建築雑誌『国際建築』に掲載された住宅をまとめた『現代住宅 1933-1940』²⁾には、土浦の作品が、日本の建築家では最多の15件掲載されており、戦前期のモダニズム住宅の先導的な役割を果たしたことがわかる。しかしフランク・ロイド・ライトに関連した視点、およびモダニズムの視点以外から、住宅作品が論じられることはなかった³⁾。2001年から2002年にかけて、土浦亀城建築事務所の建築に関する資料（建築図面、設計資料、建築写真）が、東京都江戸東京博物館に寄贈された⁴⁾。それらの資料から住宅作品を俯瞰すると、和風や、和風と国際様式の間隔的な外観をもつ住宅が存在しており、また平面計画においては、和室をもつ事例が多く存在した。本稿では戦前の住宅作品をとりあげ、その外観と起居様式から、「国際性」と「伝統的起居様式」の振幅において、土浦が住宅において目指したものを考察する。日本の住宅は、伝統的住宅の西欧化であるとともに、日本に導入された西洋館の和風化であるという考え方⁵⁾に基づけば、土浦の住宅作品は、「外観と生活様式の両面において国際様式（椅子坐式）の住宅」が、日本の現実のなかで、その伝統性との接点を見出す過程と考えられる。戦前期の住宅一般について起居様式を論じた研究⁶⁾、および外観の意匠と起居様式との関係を論じた研究⁷⁾は存在するが、土浦の住宅作品に触れたものはない。また、土浦亀城の戦前の設計活動に関連した研究として、平面計画や事績に関するものはあるが⁸⁾、外観の意匠と起居様式を論じたものはない。なお、

本稿は拙稿⁹⁾「土浦亀城の戦前の住宅に関する考察—国際様式と和室について」を再検討し発展させたものである。

2. 土浦亀城の略歴

土浦亀城は1897年6月29日、父市松¹⁰⁾、母光枝の長男として、茨城県水戸市に生まれた。英語教師である父が、宣教師と交流があったため、幼い頃より欧米の文化に慣れ親しんで育った¹¹⁾。旅順の小学校、中学校、東京の旧制第一高等学校から東京帝国大学建築学科に入学、1922年に卒業した。在学中よりフランク・ロイド・ライトを敬い、帝国ホテルの現場手伝いを経て、1923年4月より信子夫人とともに渡米、ロサンジェルスおよびウィスコンシン州タリ阿森にてライトの事務所に勤務しながら、所員たちとの共同生活を経験した¹²⁾。師であるライトや、友人であるリチャード・ノイトラ、ルドルフ・シンドラー、ワーナー・モーザーらとの交流を含めた2年半のアメリカ生活は、建築家としての土浦の基本的姿勢を培ったといえる。1926年1月に帰国すると、御茶ノ水の文化アパートに住み、大倉土木に勤務する傍ら、個人的にも住宅を設計し、設計競技に参加した¹³⁾。さらに1934年11月に大倉土木を辞して、東京の京橋に土浦亀城建築事務所を設立¹⁴⁾、1969年に事務所を閉鎖するまで、商業施設、住宅、病院建築等の分野で設計活動を行った。その間、1939年から1943までは、中国東北地方の長春（旧新京）に支所を置き、満州国迎賓館や新京市長公邸などを設計した¹⁵⁾。戦前の代表的な作品として、強羅ホテル、野々宮アパート、徳田邸（トクダビル）などのコンクリートによるモダニズム建築や、自邸2件¹⁶⁾を含

【表1】土浦亀城住宅リスト(戦前)

No.	作品番号	建物名称	建築年	資料			所在地	構造	外観				起居様式			和室			敷地	延床面積
				図面	KAME	写真			ラ	国	混	和	イ	混	ユ	和室数	和室位置・用途	混在型		
1	—	山縣邸	1926	○	—	—	府下駒場	木1	ラ				混			1	1階居間	公居		
2	—	山本邸	1927	○	—	○	神田駿河台	コ3	ラ				混			4	1階夫人室、客室、3階客間、次間	私		
3	3002	伊藤邸		—	○	○		木2	国				混			1	2階子供室	私		
4	—	谷井邸	1930	○	—	○	世田谷代田	木2	国				混			2	1階居間、2階客間	公居	177.48	47.85
5	—	大脇邸		—	—	○	田無南原	木2	国				イ			0	—	—	301.8	42.56
6	3101	徳田邸	1931	○	○	○	京橋	コ6	国				イ			0	—	—		42.58
7	3102	俵邸	1931	○	○	○	小石川篤義町	木乾2	国				混			1	2階客間	私		49
8	3104	平林邸	1931	○	—	○	牛込納戸町(市谷)	木乾2	国(増築)				混			既存	—	—	301.65	
9	3105	土浦邸(1)	1931	○	○	○	下大崎町	木乾2	国				イ			0	—	—		33.25
10	3203	植村邸		—	○	○	世田谷砧村	木2			混		混			6	1階老人室、夫人室、2階客室、子供	私		141.15
11	3206	吉野邸		○	○	○	渋谷神山	木2	国				混			1	1階主人用	私	264.21	81.67
12	3208	安川邸	1935	—	○	—		コ2					混			1	2階座敷	私		
13	3209	遠藤邸		○	—	—											—	—		
14	3211	三浦邸	1937	—	○	○	大森田園調布	木2					混			2	2階座敷、寝室	私	121.14	42.41
15	3301	伊藤邸	1933	○	○	○	芝三田(二の橋)	コ2	国(増築)				混			既存+3	2階座敷他	私		
16	3303	石井邸	1933	○	—	○	仁川(兵庫)	木2	国				混			1	(名称なし)	私	118.95	46.3
17	3304	富永邸	1933	○	○	○	目黒下目黒	木2	国				混			1	2階座敷	私	580.28	55.5
18	3305	立邸	1933	○	—	—	品川五反田	木2	(増築)				混			4	1階寝室、客間	私	316.49	120.25
19	3306	若林邸	1933	○	—	—		コ2	国(増築)				混			既存+1	2階8畳	私		113.3
20	3307	米原邸	1933	○	—	—	鳥取	木2					混			7	全室和室	私		
21	3313	野口邸	1933	○	—	—	代々木									不明	—	—		
22	3314	山本博邸	1933	○	—	○	豊島目白町	木2	国(増築)				混			4	—	私	831	218
23	3315	沢野邸	1933	○	○	○	兵庫東住吉村	コ2	国				混			1	1階8畳(食連4引)	公連	391.28	105.64
24	—	竹内邸	1933	—	—	○	上大崎長者丸	木2	国(増築)				混			既存	—	—	816.21	
25	3405	高橋邸		○	○	○	赤坂一ツ木	木2	国				混			4	1階居間、客間、2階寝室、書斎	私	300	156.4
26	3407	今村邸	1934	○	○	○	杉並成宗	木乾2	国				イ			0	—	—	600	56.5
27	3412	高島邸	1938	○	○	○	品川北品川	木乾2	国				混			2	2階寝室・客間	私	120	68.8
28	3413	山森邸	1934	○	—	—	六甲	木2				和	混			4	1階座敷(居連4引)・寝室、2階10畳	公連		81.35
29	3502	長谷川邸	1935	○	○	○	上大崎長者丸	木2	国				イ			0	—	—	70	44.75
30	3503	中野邸	1931	○	—	○		木1	国(増築)								—	—		
31	3505	三島邸	1934	○	○	○	渋谷千駄ヶ谷	木2	国(増築)				混			0	—	—	191.8	61.82(49.19)
32	3507	名倉邸	1935	○	—	—	名古屋	木2					混			2	1階子供室、2階10畳	私		
33	3508	徳川邸	1935	○	○	○	渋谷猿楽	コ3	国				混			2	2階座敷	私	1652.3	382.84
34	3509	北岡邸	1935	○	—	—		木2					混			2	1階8畳、2階客間	私		56.3
35	3510	北村邸	1935	○	○	—	井荻町	木2					混			4	1階老人室、茶の間、2階寝室、子供	私	358.34	36.66
36	3511	杉森邸	1935	○	○	—	井荻町	木2					混			3	1階8畳、2階8畳	私		34.75
37	3512	田宮邸	1935	○	○	○	豊島長崎南町	木乾2	国				イ			0	—	—	154.38	47.2
38	3601	鈴木邸	1936	○	—	○	三鷹村下連雀	木2	和				混			2	1階4畳半(応連2引)、2階8畳	公連		53.67
39	3602	尚邸	1936	○	○	○	目黒柿の木坂	木2					混			0	—	—		79.75
40	3603	香川邸	1935	○	—	○	渋谷猿楽	木2	国				混			3	1階茶の間(食連2引)、2階2室	公連	209.31	60.56
41	3604	角谷邸	1936	○	○	○	渋谷猿楽	木2	国				混			4	1階主婦室、主人書斎、2階寝室、座	—	541.37	118.12
42	3605	宮口邸	1936	○	—	○	渋谷青葉	木2	国				混			1	1階座敷	私	1027	76.13
43	3614	赤星邸	1936	○	○	○		木2	国				混			2	2階座敷、寝室	私		44
44	—	山本邸(鎌)	1936	○	—	—	鎌倉	木2	国(増築)				混			既存	—	—		増築33.26
45	3703	竹原邸	1937	○	○	○	麻布一本松	木2	国				混			1	2階8畳	私	135.25	75.79
46	3704	岩出邸	1937	○	○	○	神田駿河台	木1	国				イ			0	—	—	148.44	56.25
47	3705	池尾邸	1938	○	○	○	品川五反田	木2					混			1	2階座敷	私	199.97	76.9
48	3706	上野邸	1936	○	○	○		木1					混			5	座敷、客間、寝室	私		107.24
49	3709	遠藤邸	1937	○	○	○	世田谷	木1					混			0	—	—	383.77	69
50	3712	保坂病院	1939	—	○	○	築地	コ3	国				混			3	2階8畳、座敷	私		
51	3803	鈴木(團)邸		—	○	○	目黒平	木2					混			2	1階座敷(食連2引)、2階座敷	公連		
52	3805	土浦邸(2)	1935.34	○	—	—	上大崎長者丸	木乾2	国				イ			[2]	地階6畳半、2階9畳	私		46.1
53	3903	吉野別邸	1936	○	○	—	秋谷	木2					混			4	10畳、8畳、6畳、4畳半	—		
54	3909	原信太郎邸		—	○	○		木1					混			1	座敷	—		
55	4018	秋山邸		—	○	—		木2					混			2	1階寝室、2階座敷	私		
56	4202	荒井邸		—	○	—		木1								3	居間、座敷	—		

作品番号：図面、写真、KAMEKI'S 設計 PLAN に付されている番号

建築年：図面に記された建築年

図面：図面の有無、KAME: KAMEKI'S 設計 PLAN の図面の有無、

写真：建築写真の有無

所在地：図面や雑誌に記載された地名

構造：コ(RC造)、木(木造)、乾(乾式構造) 数字(階数)

外観：ラ(ライト風)、国(国際様式)、和(和風)混(大壁で勾配屋根をもつ国際様式と和風の混在型)

起居様式：イ(椅子坐式)、ユ(床坐式)、混(混在型)

和室数：既存(既存部分に和室がある)

和室位置・用途：(食連4引)は、その和室が食堂に連続しており、その間に4枚の引き戸があることを示す。

混在の型：起居様式の混在型の分類 私(和私室混在型)、公居(和公室混在型(居間))、公連(和公室混在型(連続))

敷地・延床面積：単位(坪)

*存在しないものは(—)、不明なものは空欄とした。

む木造乾式構造の住宅が挙げられる。これらの作品のなかで、現存する土浦邸(2)すなわち「土浦家住宅」は東京都指定有形文化財(建造物)に指定されており、日本におけるモダニズム住宅の代表例と評価されている¹⁷⁾。なお、土浦はこの自邸に1935年の竣工時から1996年に亡くなるまで居住した。

3. 戦前期の住宅の概要

寄贈された建築図面および建築写真¹⁸⁾、さらに「KAMEKI'S 設計PLAN」¹⁹⁾の平面図から、土浦亀城あるいは土浦亀城建築事務所の戦前の日本国内の住宅作品として56件²⁰⁾を【表1】にあげた。

帰国後の最初の2件の住宅、1926年の山縣邸(No.1)【表1】のNo.を()内に記す。以下同様)と、1929年の山本邸(No.2)は、大倉土木株式会社建築部として土浦が設計を担当したもので、フランク・ロイド・ライトのデザイン・ボキャブラリーを多用した住宅である。しかし1930年以降は、「白い都市型モダニズム」とよばれる国際様式の外観をもつ住宅が多く建てられるようになった。その転換の理由は、当時のフォイエエルシュタインとの交流が指摘されている²¹⁾が、その他にアメリカ時代の友人であるリチャード・ノイトラやワーナー・モーザーから得たヨーロッパのモダニズムの知識と、その合理性・機能性への同調があげられる²²⁾。土浦は日本の住宅改善のために、安価で合理的な工法として木造乾式工法を開発、1931年から1935年までに7件の住宅を建てた。この木造乾式工法の住宅を含め、平坦な大壁の壁面と陸屋根をもつ国際様式の住宅が、1937年頃まで多く建てられた。構造が判明している住宅53件のうち、木造は46件、コンクリート造は7件というように、土浦の住宅の多くは木造であった。

戦前期の住宅の約半数が1934年12月に事務所を設立する以前に建てられており、大倉土木に勤務する傍ら、個人的にも活発な設計活動を行っていたことがわかる。谷井邸(No.4)、大脇邸(No.5)、土浦邸(1)(No.9)²³⁾、土浦邸(2)(No.52)は、信子夫人との共同設計²⁴⁾で、都市の若い知識階層を施主とした住宅である。一方、植村邸(No.10)は、大倉土木の設計で担当が土浦であり、山本博邸(No.22)、池尾邸(No.47)などの大規模な住宅は、大倉土木を介して設計依頼された²⁵⁾。事務所設立後に、住宅の規模と外観が多様化する傾向が見られるが、国家総動員法が施行された1938年以降、住宅数は減少する。コンクリート造の保坂医院以外に国際様式の外観はなくなり、勾配屋根の木造平屋が増加した。

4. 外観と起居様式

4-1 外観

外観が不明な8件を除く48件の外観をその特徴から、A. ライト風[ラ]:ライトのデザイン・ボキャブラリーを用いた外観意匠をもつもの B. 国際様式[国]:外壁は平坦な大壁、屋根は陸屋根で白色系の箱型であるもの C. 和風[和]:外壁は真壁で、屋根は勾配屋根であるもの D. 混在型[混]:外壁は平坦な大壁、屋根は勾配屋根であるもの、に分類して検討する²⁶⁾。

外観が国際様式であるものは、32件²⁷⁾と多数をしめ、1930年から37年までに集中している。ライト風は2件、和風は3件、混在型は11件であった。混在型は、1934年以前は植村邸²⁸⁾だけであるが、1935年以後は10件に増加した。外観について概略化すると、ライト風→国際様式→混在型というように変化した。【図1】土浦は、

【図1】外観と起居様式の変遷図

起居様式混在式の3タイプ:ba(和室は私室として存在) bb-1(和室は居間など公室として単独に存在) bb-2(和室は公室として居間に連続して存在)

「在来の様式から新しいものに踏み出そうとするときには、まず在来の様式を打ち壊す」必要があり、そのために「やはり真四角なものを建てていくということをやったわけで、真四角なものが最終的なものだと思ってやったわけじゃない」²⁹⁾と述べており、国際様式の外観が住宅改善の手段であったことを示唆している。土浦にとって「国際様式」の外観は、住宅改善にもっとも効果的な合理的な形態を表象するものであった。だからこそ木造住宅における陸屋根の難しさを了解した上で採用した³⁰⁾のだが、最初に国際様式の外観を用いた5年後の1935年頃から、より現実的な勾配屋根(特に切妻屋根)を採用するようになった。この「混在型」は、白い平坦な壁面と切妻屋根をもつものが大半を占めるが、なかには部分的に羽目板を貼った外壁や、複雑な屋根形態をもつものもある。これは、住宅改善に有効な「国際様式」の外観が、すでに新しいものではなくなったこと、さらに事務所所員の増加により、作品が多様化したことがその理由であろう。なお、和風の外観は1933年以降3件見られるが、土浦の作品としては異色である。

4-2. 起居様式

すでに指摘されているように土浦の住宅の特徴は居間・食堂を中心とする平面計画にある³¹⁾。南面する居間とそれに連続する食堂をもつ住宅は43件あり、それらは椅子坐式を基本としている。起居様式からa. 椅子坐式[イ]:和室³²⁾のない住宅、b. 混在式[混]:椅子坐式と床坐式(和室)が混在する住宅、c. 床坐式[ユ]:和室が中心の住宅に分類して検討する。なお、増築として建設された平林邸以外すべての住宅に存在する女中室³³⁾については、本稿では和室数に数えていない。当時女中室を畳敷とするのは西洋館においても一般的であった³⁴⁾。

a. 椅子坐式[イ]:和室のない住宅

和室のない椅子坐式の住宅は11件である。2件の自邸を含め、その施主の多くは欧米での生活経験者であった。大脇邸の場合、お茶の水の文化アパート時代に土浦と知り合った施主が椅子坐式の生活を希望したという³⁵⁾。徳田邸は、アメリカで学んだ歯科医師が施主であった³⁶⁾。長谷川邸(No.6)は海外生活経験のある画家³⁷⁾、田宮邸(No.37)は留学経験のある理学博士、遠藤邸(No.49)【図9】は、ハワイから戻った事業家が施主であった³⁸⁾。土浦邸(2)(No.52)【図2】の場合、1935年の新築時においては椅子坐式のみであったが、

【図2】土浦自邸(2)(1935,1938) 南立面図、地・1・2階平面図（上:1935年、下:1938年）

1938年に土浦の母の部屋として1階に9畳、母の使用人のための部屋として地階に6畳半の和室を増築した。しかし増築部の大半は、母の死後1958年頃に取り壊されて現在に至っており³⁹⁾、土浦自身は和室を全く使用しなかった。

b. 混在式〔混〕：椅子坐式と床坐式が混在する住宅

椅子坐式と床坐式が混在する住宅は、既存建物に和室がある4件⁴⁰⁾を含む37件であった⁴¹⁾。混在式平面計画の大半は、椅子坐式の居間・食堂を中心としており、和室は客間、老人室、寝室、座敷などの個室（私室）として存在するものと、居間・食堂など公的な部屋（公室）⁴²⁾として存在するものの二つのタイプがある。前者を和私室混在式ba、後者を和公室混在式bb.に分類する。

ba. 和私室混在式：椅子坐式中心で個室としての和室がある住宅

書斎、客間、座敷、老人室、主婦室などの私的な和室の多くは、2階に位置している。それらの和室の出入口には開き戸が多く見られ、和室も個室の一つとして扱われていることが平面図から読み取れる。数少ない和室の写真や図面から内装を調べると、赤星邸（No. 43）【図6】のように大壁、平天井のものと、山本博邸（No. 22）、角谷邸（No. 41）、池尾邸（No. 47）【図7】、鈴木邸（No. 51）のように、真壁・竿縁天井⁴³⁾のものが存在した。格式を表現する床・棚を備えた正式な和室の場合は、伝統的な真壁・竿縁天井を用いており、土浦は二つのタイプの和室を使い分けていた。

bb. 和公室混在式：椅子坐式中心で公的な和室がある住宅

初期の山縣邸（No. 1）【図3】と谷井邸（No. 4）【図5】では、生活の中心となる位置に和室が置かれている。まず山縣邸の居間は、7畳半の和室である。他の部屋が洋間であるにもかかわらず、居間のみ和室としているのは、床坐式の食事と団欒が施主の家族に不可欠だったためと思われる。また谷井邸では、1階食堂と子供室の間に和室がある。「全部が椅子式であれば、1階の3室は引き戸あるいは折り畳戸で連続され、必要に応じて、あるいは大きな1室として、あるいは2室、3室として使用する事ができて、はるかにフレキシブルな間取りとなります。2階も同様」と土浦は記述しており⁴⁴⁾、椅子坐式の徹底を意図したが果たせなかったことがわかる。以上の

【図3】山縣邸(No.1) 南立面図、平面図、居間平面図・展開図(東面、南面)

2例は、生活の中心となる居間が和室という床坐式の起居様式から脱することのできない時代背景を反映しており、この2例以外には存在しない。1933年以降は、椅子座の居間・食堂に隣接・連続する和室が出現し、沢野邸（No. 23）のように2連あるいは4連の引戸（襖）によって居間や食堂と連続可能な和室が5件存在した⁴⁵⁾。前者を「和公室混在式（居間）」（bb-1）、後者を「和公室混在式（連続）」（bb-2）と名づけて分類すると、前者は1930年以前、後者は1933年以降にみられた。【図1】

c. 床坐式〔ユ〕：和室が中心の住宅

全室和室ないし和室を主とした平面をもつものは5件である。1933年の米原邸（No. 20）【図8】を除く他の4件は1937年以降に建設されており、第二次世界大戦に関連した住宅不足と経済状況の悪化を反映している⁴⁶⁾。

以上の起居様式の変遷を概略化すると、「混在型」は全般にわたってみられ、椅子坐式は1930年から1937年に、床坐式は1933年以降にみられた。【図1】

4-3. 外観と起居様式の関係

外観と起居様式の関係を数量的に図示するために、外観（国際様式-混在型-和風）をx軸に、起居様式（床坐式-混在式-椅子坐式）をy軸にとり⁴⁷⁾、B-a, B-b, B-c, D-a, D-b, D-c, C-a, C-b, C-cという9つの欄に、該当する住宅作品NO.を記入した。【図10】 外

【図4】B-a 土浦自邸(1) (No.9) 外観と1, 2階平面図

【図9】D-a 遠藤邸(No.49) 南立面図、1階平面図

【図5】B-b 谷井邸(No.4) 外観、食堂、1・2階平面図

【図10】外観と起居様式による分類図 (番号は【表1】の住宅番号に対応)

*外観ライト風A-bはx軸上に存在しないが、D-b欄に記載した。

*混在式bは、ba私室混在型およびbb公室混在型に分けて記載した。

【図6】B-b 赤星邸(No.43) 外観、和室、1・2階平面図

【図7】D-b 池尾邸(No.47) 外観と和室

【図8】C-c 米原邸(No.20) 南立面図、1階平面図

観が国際様式の住宅において、椅子坐式のB-aは9件、起居様式が混在するB-bが21件で、B-cは0件であった。外観混在型では、椅子坐式D-aが2件、混在式D-bが1件、床坐式D-cが1件であった。外観が和風の住宅では、C-aは0件、C-b 1件、C-c 2件、外観がライト風の住宅では、A-bが2件⁴⁸⁾であった。

土浦が、自邸である土浦邸(1)(No. 9)【図4】および土浦邸(2)(No. 52)の新築時に実現したような、B-aのタイプは、海外生活経験のある、都市部の若い知識階層のための住宅に限られていた。「半日を教室で腰掛け、自動車、電車に乗り、スポーツをやる今の学生には、本式に坐る人が少ないから、近い将来に於いて全く坐らない時代が来る事を想像し得る。」⁴⁹⁾と、土浦は椅子坐式の生活を念頭において住宅を考えていたが、現実的に和室を必要とする施主が多く、和室のあるB-bのタイプにならざるを得なかった⁵⁰⁾。その場合、国際様式の外観が損なわれないよう、和室の存在が外観に反映しない工夫がなされた。谷井邸(No. 4)【図5】の外観と和室に関して、「居間の南側に縁側というか廊下がついているのは、立面に障子等の和風のものが出てこないようにするためです。」⁵¹⁾と土浦は説明している。吉野邸(No. 11)は1階の書斎、富永邸(No. 17)は2階の座敷、高島邸(No. 27)は2階の寝室と客間、角谷邸(No. 41)は1階主婦室と主人室、赤星邸(No. 43)【図6】は2階座敷と寝室、竹原邸(No. 45)は音楽室の吹き抜けを見下ろす2階の8畳間が和室であったが、外観から見えないように、縁側を設けカーテンをつける、窓の高さや大きさを洋間と合わせるなどの工夫がなされている。また、これらの住宅が雑誌に掲載される際には、国際様式の外観と椅子坐の内部空間のみが取り上げられ、あたかも和室がないような印象を与えることが意図された⁵²⁾。

土浦は米国での生活や、文化アパートでの生活経験をふまえ、「現代人の生活の形式は変化しつつある。老人や親類を同居させて居た大家族制度は破壊されつつある。減多に使はない様な客室は要らない。」⁵³⁾と伝統的な住宅の合理化を図っていた。そして住宅建築の標準化を第一に考え、「畳が三尺に六尺の大きさで一つのユニットを成している」伝統的な日本建築を評価していた⁵⁴⁾。それはリチャード・ノイトラが日本の畳や家具の標準寸法を評価したことと同じ意識であったと思われる⁵⁵⁾。土浦邸(2)に増築された和室は9畳と6畳半、山縣邸では7畳半と表記があり、伝統的な畳数にこだわらないのは土浦にとって畳がユニットの単位であったことを示すものである。また内装について、山縣邸の居間は畳を敷いているものの、壁面は他の洋間とかわらない意匠となっており、窓の形態も外観を優先している。【図3】床の間のある伝統的な和室を設けた場合でさえ、国際様式の外観の統一性を損なうことはなかった。

5. おわりに

戦前期の住宅の外観と起居様式についてまとめる。外観：「ライト風」2件、「国際様式」が32件、「和風」が3件、「混在型」が11件見られた。「国際様式」は、1930年から1937年に集中しており、1935年以降「混在型」が増加した。概略化すると、「ライト風」→「国際様式」→「混在型」というように変化した。起居様式：椅子坐式11件、床坐式5件、混合型37件であり、居間・食堂を中心とした椅子坐式の平面であっても、多くの住宅において和室が存在した。椅子坐式は1930年から1937年に、床坐式は1933年以降にみら

れた。外観と起居様式：土浦が目指し、また雑誌を通して発信した「国際様式の外観と椅子坐の起居様式」という住宅タイプは、9件にすぎず、外観は「国際様式」であるが、椅子坐と床坐を混在させた住宅が21件あった。このように椅子坐の徹底は困難であったが、和室の存在は「国際様式」の外観から判別できないよう窓の位置などが工夫されており、あくまでも外観の純粋性が重視された。

土浦の関心は、日本の住宅の標準化・合理化であり、それを実現する上で国際様式の外観は有効な手段であった。そして、この国際様式の住宅は、和室を排除するのではなく、必要に応じて取り込んでいたのであり、そこには、畳を「標準化」の単位と捉える基本的な考え方があった。前述した土浦邸(2)増築の経緯は、土浦が目指す「国際様式で椅子坐式」の住宅が、和室を必要とする現実に対応し、最終的には椅子坐式を貫くという土浦の基本的姿勢を端的に表しているといえる。土浦が目指したものは、モダニズムの原点である標準化された合理的なデザインと住まい方であった。そこでは和室も畳という床材を使用した個室であり、その考え方は戦後の日本の住宅に引き継がれた。

【謝辞】本稿をまとめるにあたって資料収集にご協力いただいた中村常子氏と江戸東京博物館の早川典子氏に感謝いたします。

註

¹⁾ 西澤泰彦「昭和初期モダニズム—建築家土浦亀城と彼をめぐる人々」『SD』8807、西澤泰彦「初期モダニズムと建築家土浦亀城」『SD』9607、藤森照信「昭和住宅物語①土浦亀城邸—モダニズムの青春」『住宅特集』8605 等

²⁾ 国際建築協会編 昭和16年、全4巻

³⁾ 土浦亀城の戦前の設計活動に関連した研究として、西澤泰彦「建築家土浦亀城と昭和初期モダニズム」『SD』8807 および「初期モダニズムと建築家土浦亀城」『SD』9607 があるが、どちらも昭和初期の土浦の住宅をモダニズムの視点から論じており、最終的に「白い都市型モダニズム」として完成するとしている。起居様式については論考されていない。

⁴⁾ 2002年7月25日に第1回目として、2003年3月26日(追加分2003年7月30日)に第2回目として中村常子氏より寄贈された。

⁵⁾ 内田青蔵「日本の近代住宅」鹿島出版会、pp.240-241、1996。わが国の近代住宅の変遷過程を「和館の＜洋風化＞」と「西洋館の＜和風化＞」の二軸から見ることを基本的な視点にしている。

⁶⁾ 久保加津代「大正デモクラシー期の『婦人友』誌にみる住生活改善」日本建築学会計画系論文第471号、pp.155-163、1995。『婦人友』に掲載された住宅をイスザ住宅・ユカザ住宅・混在住宅に分類・考察し、イスザ化を進めようとする専門家に対して、読者は現実的な混在住宅を望んだと結論づけている。

⁷⁾ 内田青蔵「椅子坐式生活様式の導入過程に関する一考察—「あめりか屋」の住宅作品を通して—」住宅総合研究財団研究年報 NO.15、pp.15-28、1988。「あめりか屋」の住宅は、椅子坐式と床坐式の混合した「和洋折衷住宅」であり、椅子坐式の部屋は大壁、床坐式の部屋は真壁というように、部屋を単位としていたこと、そして大正末頃から椅子坐式と床坐式の二重生活を当然とする傾向が強かったことが記述されている。

⁸⁾ 小川信子「土浦亀城の住宅計画」『SD』1996年7月号 戦前の住宅の平面計画の特徴として、「簡易化」と「公私空間の分離」「食堂と居間のつながり」「食堂と台所のつながり」が指摘されている。また事績に関するものとして、拙稿「女性建築家としての土浦信子—亀城との協力関係について」日本建築学会大会学術講演梗概集2001.9 および「土浦亀城・信子夫妻のアメリカ滞在—異文化交流の視点から」日本建築学会大会学術講演梗概集2000.9 がある。

⁹⁾ 日本建築学会大会学術講演梗概集2004.9

¹⁰⁾ 土浦市松(1868~1926)東京帝国大学予備軍卒業。

¹¹⁾ 1989年10月6日の土浦亀城氏への聞き取りによる。

¹²⁾ 小川信子・田中厚子『ビッグ・リトル・ノブ ライトの弟子・女性建築家土浦信子』ドメス出版、pp.50-103、2000。1989年秋に筆者が数回にわたって行った聞き取りをまとめたものである。

¹³⁾ 西澤泰彦「初期モダニズムと建築家土浦亀城」『SD』1996.07 pp.17-18。東京地下鉄道株式会社地下鉄ビルヂング設計競技。

¹⁴⁾ 1935年当時の所員は土浦稲城、今井親賢、郡菊夫、松村正恒、河野通祐である。1938年当時は上記に加えて、森田良夫、森田茂介、後に田中正義、笹原貞彦、村田政真が加わった。河野通祐『蚯蚓のつづき』大龍堂書店 p.34、p.53、1997。

¹⁵⁾ 14) 前掲書 p.55. および西澤泰彦『海を渡った日本人建築家』彰国社. p179, 1996.12

¹⁶⁾ 土浦邸(1)(No.9)および土浦邸(2)(No.52)をさす。

¹⁷⁾ 平成7年3月27日に指定された。「室内の明るい立体的な組み立ては、モダニズム建築の特徴を遺憾なく発揮している。」「大正期の田園に建つ瀟洒な洋風住宅から、昭和期の都市型小住宅へ転換していく住宅史の流れを知る上で、欠かすことのできない最も代表的な住宅である。」とプレートに記載されている。

¹⁸⁾ 寄贈された写真は主に建築作品の外観と室内、そして図面を写したものである。ファイルに「新建築写」、「アトリエ堀野」、「現代建築加藤写真館」等の名称がみられ、『新建築』、『国際建築』、『現代建築』へ掲載された写真が含まれる。

¹⁹⁾ 「KAMEKI's 設計 PLAN」と表書きされた緑色のアルバムに、1930年から1942年までの45件の作品の平面図が貼りこまれており、うち住宅・住宅部を含む建物は35件である。中村常子氏所蔵。

²⁰⁾ 江戸東京博物館に寄贈された図面と「KAMEKI's 設計 PLAN」に存在するすべての独立住宅をさす。ただし、徳田歯科医院(徳田邸、トクダビル)と保坂病院は医院との併用住宅であるが検討の対象とした。またファイルのみが存在し、資料のない吉田邸(1931)、岩出邸(1933)、大宮の山本邸(1934)は省いた。土浦自邸(2)は1935年の竣工であるが、「KAMEKI's 設計 PLAN」の作品番号3805に従って1938年に配した。

²¹⁾ 藤森照信「土浦亀城邸 モダニズムの青春」『住宅特集』pp125-126, 1986.05

²²⁾ 12)前掲書. pp84-85.

²³⁾ アルバム「KAMEKI's 設計 PLAN」では、この自邸と同じ平面図が「3105 岸本邸」と表記されている。おそらく売却後の居住者名と思われ、本稿では作品番号3105を採用し、土浦邸(1)と表記した。

²⁴⁾ 谷井邸図面の設計者としての署名は、「N. Tsuchiura」、大脇邸と土浦邸(1)では、「ツチウラカメキ・ノブ」と連名になっており、信子の設計への関与が認められる。

²⁵⁾ 中嶋いづ「土浦亀城」日本女子大学家政学部住居学科昭和五十五年度卒業論文。戦前期の住宅に関する土浦のインタビューが記載される。山本博邸p175, 池尾邸p299

²⁶⁾ この分類は本論における分類であり、一般的な住宅の外観分類を考慮したものではない。

²⁷⁾ 「国」には和風の既存建物に連結して国際様式の住宅を増築したものが含まれる。

²⁸⁾ 「日本風の屋根をもつ洋風住宅」であり、玄関の屋根等のデザインは自分の案ではないことが明記されている。『新建築』1933.08

²⁹⁾ 「対談 土浦亀城・磯崎新 1930 年前後」『都市住宅』1972.12

³⁰⁾ 「屋根は陸屋根にして、テレスとか運動場に使用したいのであるが、木造の場合には、雨、雪の為に構造と施工方法に適当なる考慮を払わないと不結果に終る事がある」と記述されている。「新住宅建築の問題」『国際建築』1931.03

³¹⁾ 「住宅の平面は、いずれも居間と食堂が一体となり、できる限り広い面積が確保され、しかも住宅の中心に置かれている。」13) 前掲書 p18.

³²⁾ 本稿では、平面図において畳の表記により畳数が判明する部屋を和室とし、その他の内装は問題としない。

³³⁾ その多くが3畳あるいは4畳半であるが、6畳や8畳の例もある。

³⁴⁾ 7)前掲書. p20.

³⁵⁾ 25)前掲書 p.85.

³⁶⁾ 徳田邸は6階建てビルの4,5階が住宅部分であった。施主の徳田鐵三は大正時代に渡米、ネブラスカ州オマハ市の大学とニューヨークの大学院で歯科医学を学び、ヨーロッパ各国の歯科医学を視察しながら、1928年に帰国したという。植田実『集合住宅物語』みすず書房 p.81,2004

³⁷⁾ 施主の長谷川三郎(1906-1957)について土浦は「施主は長谷川三郎という画家をしていた人で、アメリカで美術の教授をしたり夫人がアメリカ人だったりのので、洋式の生活でした。」と語った。25) 前掲書p235.

³⁸⁾ 25)前掲書 p218 p310.

³⁹⁾ 中村常子氏のご教示による。

⁴⁰⁾ 平林邸、立邸、竹内邸、三島邸は、和風住宅に繋げて増築され、新築部には和室がない。

⁴¹⁾ 増築の既存部の和室は部屋数に入れず「既存」とし、新築部のみ和室数を【表1】に示した。

⁴²⁾ ここで「公室」とよぶ部屋は、居間や食堂のように家族が集まる部屋を意味し、対外的に公的な応接間などを指すものではない。

⁴³⁾ 山本邸、角谷邸、宮口邸、池尾邸、鈴木邸は、真壁・竿縁天井、高橋邸は大壁・平天井で、赤星邸には両者が見られた。山本邸には床の間、違い棚、付書院があり、池尾邸と鈴木邸には床の間と付書院がある。

⁴⁴⁾ 土浦亀城「谷井邸に関して」『新建築』1931.3

⁴⁵⁾ 井上祐一「遠藤新設計による大正・昭和初期の住宅平面からみた生活空間の変容について」『日本における大正・昭和前期の住宅にみるフランク・ロイド・ライトの影響に関する研究』(学位論文、私家版, p.12, 2004.では、居間、食堂および座敷の関係が「隣室関係」「床の段差」「建具」の3点から考察されており、参考とした。

⁴⁶⁾ 戦時期の住宅不足に対応するために、住宅問題委員会が作成した「庶民住宅の技術的研究」には、生活方式として「居住の形式は主として坐式とす。」と書かれている。『建築雑誌』p80. 1941.2

⁴⁷⁾ 5) 前掲書. pp244-245,1996. 日本の近代住宅の変遷過程を論証した「私論—日本の近代住宅の系譜」の「系譜図2」を参照した。

⁴⁸⁾ ライト型はx軸上に存在しないが、例外として【図7】に含めた。

⁴⁹⁾ 31) 前掲書.

⁵⁰⁾ 「こちらの場合(土浦自邸(2))完全洋式ですけど、他の住宅でも日本的な匂いは全部消してデザインされたのですか。」と問われ、「そうもいきませんね。家庭によっては、やはり年寄りの部屋をひとつ日本間にしてほしいというのがあります。」と答えている。対談「土浦亀城、磯崎新 一九三〇年前後」『都市住宅』1972.12 p75.

⁵¹⁾ 25) 前掲書 p75

⁵²⁾ 戦前の主要な建築専門雑誌である『国際建築』および『新建築』に掲載された住宅は30件である。国際様式という新しい時代の住宅様式を用いた土浦にとって、作品の雑誌への発表および作品の見せ方は重要だった。発表された住宅の外観は国際様式が多く、内部の写真で和室を写した角谷邸の1枚を除くすべてが、居間や食堂など椅子坐式の起居様式を写したものである。

⁵³⁾ 30) 前掲書.

⁵⁴⁾ 土浦亀城「住宅建築の標準化」『文化生活』文化普及会発行昭和2年1月号 pp94-96. 「日本住宅は、今日までの日本人の生活によく合致し、難点の打所のない立派なもので且つ安価であった。加ふるに藝術味の豊かであつたことも忘れてはならない。」とも記されている。

⁵⁵⁾ 「畳、引き戸から箆筋にいたるまで、皆が同じ標準寸法を用いている。」と記述し、日本の住宅を賞賛している。Life and Shape, New York: Appleton Century Crofts Publishers, p226, 1962.

(2005年3月10日原稿受理, 2005年8月29日採用決定)